

---

# 月下の妖精の美学とその受難

青いうさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月下の妖精の美学とその受難

### 【Nコード】

N2290X

### 【作者名】

青いつばね

### 【あらすじ】

生まれも育ちもこの世界な私。

昼間は王宮で侍女（その他）として精を出し、夜は夜で精を出す。

えっ？うっふんなお仕事じゃないですよ？

えー、よく聞いてください。ゴホン、我が家の家業は歴とした怪盗です！

ちよつと！泥棒じゃないですよ！怪盗！

華麗な手口であなたのハートも盗み出す 怪盗月下の妖精、ここに

参上！ですよ！

……この名前も台詞も超恥ずかしいんだから　そこ！笑うなア！

怪盗少女の、文章滅茶苦茶進む方向が作者もわからない　サクセス  
？ストーリーー

## ログ001 講義、美学、原因

私の名前はココ

ちよっぴりお茶目な美少女怪盗です。

ウソです。でも怪盗というのは本当です。つまり美少女というのはウソです。

そうです。

今、王都を騒がす美少女怪盗『月下の妖精』とはこの私のことなのです。

仮面をつけているので顔はわからないはずですが、噂ではもっぱら美少女として触れ回っています。

皆さんもそう聞いているはずですよ。そして、聞いた話そのままに『月下の妖精は絶世の美少女だ』と話した筈ですよ。ね？ね？そうでしょう？そうじゃねえと困るんだよ！！

……ゴホン、失礼。取り乱しました。どうにも仕事でストレスしか感じないもので……。申し訳ありません。

さて、私の仮面の下を見た皆さんはさぞがっかりするのでしょうか、幸いなことに未だこの素顔を見た方はいないので大丈夫。

何が大丈夫なのかと、そう思いますよね？私もそう思います。

そう思うのですが、まあ、私の職業柄、聴衆の皆さんに分かりさ  
れるのは非常に困るのです。

何故なら、美少女の方が夢があるから。

美少女の類にはどう頑張ったところで入れてもらえない私（皆さん  
の中にも少なからずいらっしやるはずです）には非常に理不尽かつ  
暴力的な理由ですね。

しかし、想像してみてください。美しい妖精のような可憐な少女が、  
満月の夜に静かな街を自由自在に飛び回る。

こんな風なシチュエーションでないと、聴衆の皆さんは怪盗と納得  
してくれません。

どう考えても平凡な顔だちの怪盗より、美しい怪盗の方が神秘的で  
犯してはいけないような気になるはずです。それこそが怪盗らしさ  
なのです。

そう。

美しく、そして華麗に盗みを働かないことには、それはただの泥棒  
なのです。

しかし私は、残業ながら泥棒ではなく怪盗です。

人を魅了しそのうちに戦利品を持って霞と消える。

これぞ怪盗の美学なのです。

本当の心の内を言うならば、私は怪盗の美学などくそくらえという

思いしか無いのですが。

盗むならもつと効率の良い方法はいくらでもありますし、目立ったところでそれは怪盗の美学に叶うだけなのです。

私が思うに、怪盗の美学とは捕まりやすい方法を追求した、最も効率の悪い盗みの方法です。

嫌々やっているのです、やめたくて仕方ありません。それはもう切実に。

が、そう言う訳にもいかない深い深い空より深い理由があるのです。

それは偏に、私の父と私の初恋の君にあります。

ログ001 講義、美学、原因（後書き）

グダグダ主人公 何を言いたいんだ……

a

初恋。

それは、ほろ苦く、それでいて甘い恋の記憶。

がたんごとんと馬車が揺れる。豪華な馬車ではあるが、馭者はずいぶん下手だ。

普段ならばここでリバースの一つもかますのだが、今日のココ・アルヴァは違った。

何しろ、今日は待ちに待った「当日」なのだから。

ロリータ大陸の南東に位置するゴシック王国。

大陸の商業の中心地として古くから栄えてきた土地である。

国土こそそれほどないものの、王都ドロワーズはロリータ大陸のど

こよりも活気に満ち溢れている。商人が築きあげたゴシック王国は、温暖な気候だけが取り柄の何も無い平坦な土地であった。硬い土では畑も祿に作れず、温かい海ではたいした魚も捕れない。しかしゴシック王国は商業国として名を馳せ、今では商人憧れの地となり、ドロワーズで店が出せたら一流と言われる。

王都ドロワーズを訪れば手に入らないものは何も無い。石ころからドラゴンまで、揃っていないものはない。

ゴシック王国は険しい牟礼も、荒れ狂う大河も無い。

人々の行路を阻むものはほとんど無く、ぽこんぽこんと小さな山が点在するだけである。行商人にとって、馬で往来出来るというのは非常にありがたいことだった。

やがてその何もない土地を大国への行商の拠点にし、商人が商人のための店を開き、住み着いた。初代の国王から歴とした商人であったが、その歴史は古い。

初代国王は商神と呼ばれ、

ブルゾン

パニエ港 バッスル港 フレア港 ギャザー港

ベルクロ

暗い路地裏にひっそりと佇む一つの影。  
人一人通れるか通れないかの狭さで、その影は硬い石の壁に寄りか

かっていた。

荒い息を繰り返し、肩が激しく上下する。走らなければならないと思っても、足が棒の様に動かない。

腕に刺さったままのナイフを引き抜くと、赤黒い液体がどくどくと流れ出てきた。

それは人の血を連想させる赤黒さではなく、不自然に黒い。

止血をしなければならぬが、包帯どころか布もなく、服を裂くだけの力も残っていない。

なにより、このまま血を流し続けて死んでしまいたいという思いがあった。

どれほどの時が流れたのか、伝い流れ落ちたが地面に血だまりを作り始めた時だった。

「おい、どこ行きやがったあのガキ」

「さあな」

低く荒々しい男の怒声と、それとは正反対の、この場にそぐわないほどに落ち着いた声が耳に入る。

舌打ちの音がやけに響いた。これでは自分の荒い息も聞こえてしまいかもしれない。

足音を立てるわけにもいかず、痛む体を折り曲げ小さく蹲った。ずるずると背中が石壁に擦れ、背中 of 傷に激痛が走る。

運が良ければ、乞食の子供と勘違いされるかもしれない。

そんな可能性は万に一つもなかったが、逃げようにも足は動かない。

「探知は」

「使うまでもない。どうせどこかで力尽きただろう」

「いや、わからねえぞ。あいつらは生命力だけは無駄に……」

不自然に言葉途中で途切れた男の声に耳を澄ますと、2人の男以外の声がある。

「おい、邪魔だ。どけよ」

「はあ。これでいいですか」

少女の声だ。

高く、耳障りな声。

「なにしゃがる！」

「なにすんのよ！」

暫くしないうちに会話は言い争いになった。あんないかにも渡世人風のいかつい男とやり合うなんて、たいした娘である。

助かった。このまま暫く男たちを引き留めてくれれば、動けるようになるかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2290x/>

---

月下の妖精の美学とその受難

2011年12月26日00時56分発行